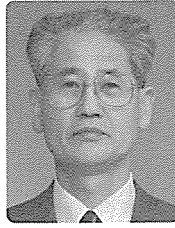


二松學舎松苓會報

卒業生の皆さんへ

松苓會會長 神津 賢一郎



卒業生の皆さん、卒業おめでとう。皆さんは四年間の学業を終え、はれて学士の学位を授与されました。心からお慶び申し上げます。また皆さんの卒業を心待ちにしておられた御父母の皆様にも心よりお祝い申し上げます。

さて、二松學舎大学を卒業すると同時に皆さんは自動的に二松學舎大学の同窓会つまり松苓會の一員になります。松苓會は昭和六年より続いている同窓會名です。「しよう

れいかい」と言ったら、二松學舎大学同窓会ですが、「松苓」とは何?と聞かれても、知らない人の方が多い。その謂われは、初代會長・山田準先生が、本学創立者・三島中洲先生の碑文の詩の結句「多産茯苓医世弊」―多く茯苓を産して世弊を医やさん―の意を解して、同窓會に「松苓」の字を冠したのだという。

「茯苓」とは松根に生ずる菌類で疾病を治す漢方薬だという。「多く茯苓を産して世弊を医やさん」は「本学を卒業した諸子は茯苓となって世の弊害を正し治す者となれ」の意。本学を巣立つ皆さんは今正にこの創立者の意を汲むべきときであります。

平成20年度ホームカミングデー開催予告

―卒業生〈松苓會員〉懇親會―

主催	二松學舎松苓會・二松學舎大学
日時	平成20年8月3日(日) 11:00~15:30
会場	大学九段校舎
費用	懇親會費として1人3,000円
イベント	卒業生・在学生・教職員合同作品展示會
期間	平成20年7月28日(月)~8月3日(日)まで(予定)
会場	九段校舎地下1・2階 展示ホール

松苓會・大学では、第4回ホームカミングデーを九段校舎で開催いたします。併せて合同の作品展も昨年同様に開催します。書・絵画・彫刻・工芸・写真・著書等を展示いたします。

ホームカミングデーには卒業生はどなたでも参加できますが、特に下記の卒業期(卒業後50年、45年、40年、35年、30年、25年、20年、15年、10年、5年を迎える卒業生)の皆様には改めて個別案内いたします。同期生お誘いあわせの上ご参加くださるようご案内いたします。

作品展も5回目を迎えます。卒業生はどなたでも出品できますので日ごろの成果をお寄せください。

文学部

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 第27回(昭和34年3月)卒業 | 第32回(昭和39年3月)卒業 |
| 第37回(昭和44年3月)卒業 | 第42回(昭和49年3月)卒業 |
| 第47回(昭和54年3月)卒業 | 第52回(昭和59年3月)卒業 |
| 第57回(平成元年3月)卒業 | 第62回(平成6年3月)卒業 |
| 第67回(平成11年3月)卒業 | 第72回(平成16年3月)卒業 |
| 国際政治経済学部 | |
| 第5回(平成11年3月)卒業 | 第10回(平成16年3月)卒業 |

ホームカミングデーの参加、作品展出品の希望者は、松苓會事務局までお問い合わせください。折り返し、出品要領等をお送りいたします。

事務局 東京都千代田区三番町6-16 二松學舎松苓會
電話 03-3261-7408

ホームカミングデー実行委員会

昨年一年間を象徴する文字は、情けないことに「偽」で

とところで、松苓會は北は北海道から南は沖縄に至るまで

あった。新しい年を迎えて、「正」の流れになると思いきや、依然として「偽」の流れが続いている。これから社会の一員となる皆さんは「世の弊害を正す」気構えを持って活躍されることを期待致します。

全国都道府県に支部があり、皆さんの先輩が活躍しております。皆さんはそれぞれの地域に赴任されると思えますが松苓會の集いなどには是非参加して下さい。心より歓迎致します。同じ大学で学んだ同窓の仲間です。心の通うところがあある筈です。
二松の友垣よ、幸あれ。

昭和62年12月1日創刊
平成20年3月22日発行
二松學舎松苓會
〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16 ☎03(3261)7408
振替口座 00180-5-160343
印刷 (株) サンセイ
〒103-0023 東京都中央区日本橋本町4-11-10 ☎03(5614)2515

臆に — 新しく松茶会の仲間入りする諸君に —



学 長 今西 幹一

卒業を祝します 平成十九年度の卒業生の皆さん、卒業おめでとございます。いま

の段階では正確な数を掴み得ていませんが、本年度も七〇〇名前後が両学部合わせて卒業を迎えることになりました。卒業を迎える皆さんに心を籠めて祝福します。

卒業の意義を噛み締め、祝意を表し、臆の言葉を申し述べる機会は、卒業式の式辞を含め複数の機会があります。

私は同一の言葉を繰り返すのが嫌いで（これは文章でも講演でも授業でも同一のテーマの反復は嫌いです）、四年間に互る学長の任期の期間の最大の苦痛です（二松へ来て幾人もの著名の人士の講演を聞

きました、そのうち三人はたまたま以前講演に接しましたが、そのとき拝聴した講演の内容と寸分違わぬものでした。聴き手が異なるからいいようなものだが、私にはまねのできぬことです。もう一人いました。尤も著名人でない私には頻繁にお座敷がかかりませんが）。

皆さんが二松學舎大学を卒業するということは同期はもとより、過去、将来の二松學舎の卒業生と同窓になると言うことです。これは各位の意識に濃淡があっても消しようのないことです。その同窓の存在の連携化、組織化、友好化、大学への帰属化を図るために、自然に、あるいは意識的に同窓会を結成していま

す。二松學舎大学にも同窓会組織として「松茶会」が存在します。すでに皆さん方からは会費を納入していただいていますから、自動的に会員とし

て加入することになります。この納入制には会員外ながら一役買いました。あるいはこうした制度には批判があるかもしれませんが、同窓意識には是非を越えたものがあつて然るべきです。

帰属意識・母校愛の強い二松の卒業生 私は他大学の出身者ですが、二松學舎に赴任して感心したことは、卒業生の母校愛の篤いこと、結束力の強いこと、後輩への面倒見が良いこと、でした。私の卒業した大学・高校・中学・小学校のいずれも同窓会が存在しますが、活動は同期会・同級会中心で、私も比較的熱心に参加しています。縦よりも横の連携です。例外は大学の方で、縦の関係の学科とクラブの会には、参加していました。

ところが、二松學舎の方はゼミの仲間による横の関係はありますが、全体、支部単位の縦の同窓の集いが盛んであります。そういう関係から同窓生各自が皆、専門学校、大学の何期であることを自覚して、きちんと名乗る時に副えることにはいつも感心しています。私自身は、小学

校は新制一期、中学は四期、高校は六期であることは自覚して、明治発する故郷伊勢の小学校はもとより、高校の方も旧制中学からの通算の期数は存じません。そういう意味では、皆さんは母校愛の篤い、結束力、友好関係の強い松茶会の仲間入りをするわけです。

二松學舎の卒業生の中でも専門学校時代、大学初期の卒業生は、母校への思い、連帯感がひととき強く思われます。地方へ行くとその感を強くします。教職に就く人が多く、相互に目的意識が共通し、研鑽、刺激し合い、先達に導かれ、同窓同士扶助することが多かつたせいもあつたからかと思えます。

同窓生の結束力が強く、同窓会活動の盛んなのは三田会（慶応）、白山会（中央）で私の地元には中央の卒業生が多く、活動も盛んです。月に一回は集まり、その際は各界から必ず人を招き、講演を中心に勉強会を開いています。懇親会を開いています。私も卒業生ではありませんが、求められて講演に行きます。過日は、松茶会の長野支部に招

かれ出席しましたが、その際講演を求められました。松茶会の総会の時もそうですが、知の大学にふさわしい組織かと思えます。教職の世界に進出の度合いの強い旧師範系の大学、一部の大学は自閥の拡大、昇進・昇格に熱心過ぎて私は好感を持っていません。新会員である皆さんも是非積極的に松茶会に参加して下さい。

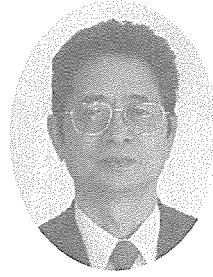
大学に帰って来て下さい。人生、社会が砂漠とは申しませんが、一方で競争社会であり、人間関係も潤滑なものではありません。学生生活を送った大学は、それに比べればオアシスみたいなものです。卒業後も折りに触れて母校を訪ねて来て下さい。

大学と松茶会では、毎年八月の第一日曜日をホームカミングデーと名づけて全卒業生の母校回帰の日としています。講演、同窓ゆかりの資料（書籍・芸術制作）の作物の展示、懇親会を開催しています。皆さんもぜひ、母校へ帰って来て下さい。今夏もまた「お帰りなさい」と迎えたいものです。

祝・新会員を迎えて

—松苓会の一層のご発展を祈念し—

理事長 大山 徳高



は、社会に対しても松苓会の誇りとなるはずで。

特に、各都道府県松苓会支部の支部長と支部会員の皆さんは、新会員の加入を心待ちにしているものと思います。

各支部長の皆さんは、常に支部活動の活性化に心をくだかれており、そういった面からも、新会員の皆さんに大きな期待を寄せているものと思います。新会員の皆さんには、

日本の春は、人の動きがとて大きい季節です。学校を例にみても、卒業から入学ということで、大きな波のうねりにも似た人の移動があります。会社などでも三月から四月は、去る者もあれば、来る者もあり、それぞれの組織が活性化し存続と発展とを可能にしているようです。

二松學舎大学の同窓会である松苓会も若く活力に溢れた平成十九年度卒業生を新会員として迎えることは、会長をはじめ会員各位の大きな喜びであろうと思います。松苓会の永続と発展とを約束するのが新会員であり、年を追うごとにその人員が増加すること

のようで、他大学をみても、卒業生の元気は、大学の元気であり、後輩である在学生の皆さんに大きな活力を与えるものようです。

また一方では、同門の先輩が集う同窓会は、他の組織とは少し異なり、より多様

で強い絆を育むもののように思います。先輩の皆さんの職業は多種多様であり、年齢も経歴も大いに異なります。当然ながら信条もさまざま。こういった多くの先輩たちの集う会は、己がより高みを求める意志をいだくのであれば、自分の向上のために格好の場となることは保証されるはずです。先輩の皆さんは、後輩

というだけで親近感を持ち、無条件で受け入れてくれます。母校の発展を願うとともに、自分自身の人間的成長のためにも、松苓会の存在を考えていただきたいと思います。活動の盛んな支部ほど会員相互の絆が強い、と言えそうです。近年、松苓会は会員の親睦を図り、会員相互の交流を深めるため、ホームカミングデ

平成19年度支部総会報告

◆北海道支部

支部長 奥村 悠二郎

平成十九年八月二十五日(土)、札幌ススキノの宮崎地鶏専門店「わが家」にて、十二名の出席を得て開催されました。

総会では、平成十八年度決算及び平成十九年度予算が承認され、平成十八年度活動実績及び大学や松苓会本部の最近の動向について報告されました。

決算、予算の内容について

1、卒業生作品展などを開催しております。また在学生の経済的支援、支部活動への援助など、その活動が目に見える形で活発化しております。新会員の皆さんの参加で、松苓会がさらに活性化されるものと確信いたしております。松苓会のますますのご発展を祈念いたします。

には力を注ぎ、四名以上の集まりを企画した場合には、分会の無い地域であっても支部助成を行います。



総会出席者

新谷 信一	27期
政井 邦夫	27期
中 紀 義	31期
奥 村 悠二郎	36期
山 崎 郁 紀	36期
川 谷 文 雄	39期
不 動 和 則	43期
岡 野 誠 一 郎	45期
佐 賀 敦 司	49期
吉 野 泰 正	55期
若 松 顕 仁	56期
永 田 哲 之	65期

道南分会総会の報告

平成十八年度の道南分会総会は遅れて今年二月十七日に開催されましたが、平成十九年度の総会は九月一日(土)、九名が参加して函館五稜郭の「喜多ろう」で開催されました。

当日は砂川から参加した吉野氏の車に私は便乗し、九時過ぎに札幌を出て中山峠から豊浦に出、長万部で昼食をとり、午後三時に函館に入り、谷地頭市営温泉に入湯。四十五度の高温には入れませんでした。四十三度の中温や露天風呂は気持ち良かった。函館

に行ったら必ず入る温泉で湯の川とは泉質も違い、すぐ側の立待岬には石川啄木の家族の墓もある。皆さんも一度行ってみてはいかがですか。

総会では、登別から今春函館に移ってきた菅野さんが初めて参加して賑やかに函館の海の幸を堪能しました。二次会では、函館舟の応酬で盛り上がりました。いつもながら吉川氏夫妻にはお世話になりました。

翌日は、大沼公園を散策し鹿部の間歌泉を見学して帰りました。来年、また函館での道南分会が行われる時は、皆さん誘い合わせて参りましょう。

道南分会総会参加者

南 部 知 正	37期
田 島 基 義	38期
開 原 正 信	39期
若 狭 一 也	39期
菅 野 敦 子	51期
吉 野 泰 正	55期
吉 川 肇	59期
吉 川 真 理 絵	60期
山 崎 郁 紀	36期



大学の近況について!!

大学は、九段校舎の新築が成り、いよいよ柏校舎から徐々に撤退して、九段一帯に校舎を集約することに決定。

その手始めとして、附属高校の並びで靖国神社向かいの学生ビルを取得して、平成二十一年春には十階建てビルを完成させる。さらに、九段校舎の近辺に土地を取得すべく具体的な交渉段階に入っている模様で、極めて近い将来に全ての学部学科大学院を九段に集約する。

これで本当に昔どおり、東京の大学に戻ることになりま

道東分会総会の報告

昨年まで北見で開催されてきた道東分会は、今年五年ぶりに十月二十七日(土)、釧路市末広町の「あぶり屋」で八名の参加を得て開催されました。

当日私は、道東は冬も近いだろうと思い、スタッドレスタイヤに履き替えて高速道路を道央道そして数日前に開通したばかりの道東道をひた走り帯広に入った。

帯広で奥村氏を乗せ、彼の運転で釧路に着いたのは日暮れ時。四時少し回ったばかりなのに初冬の道東は暮れるのが早い。

総会は初めて顔を見る五十嵐氏や帯広からの澤向氏が参加、いつも顔を出してくれる根室の伊藤夫妻や小島さん、富永夫妻の顔が見えないのは寂しかったが、米川氏が元気な姿を見せてくれて嬉しかった。道東の山海の幸を味わいながら楽しい一時を過ごしました。

特に書道を専門にしている会員が多かったので大学時代

の書道の先生や関東大学書道連盟の活動の話、学生運動の話などで盛り上がりました。

二次会は安部氏が用意していたスナックはやめて、米川氏行きつけの居酒屋で日本酒の飲みなおし。そこで米川氏お薦めのカレイをいただいたが、これは釣りをやる私も見ただことも食べたこともない絶品、ナメタカレイのようだが身が厚くそれでいてパカレイではない。焼きガレイとしては初めての味。北海道は広い。ともあれ、楽しい一日でした。お骨折り頂いた安部氏に感謝いたします。

翌日は暗くならない内に帰札したいので早めにホテルを出る。帯広で奥村氏と別れ、昼過ぎ日勝時にさしかかる。ここまでは順調だったが足の遅いトレーラーがつかまり進まない。家に着いたのは日もとつぷりと暮れた六時過ぎ、往復七七〇キロ釧路は遠い。

道東分会総会参加者

米 川 智 義	33期
川 谷 文 雄	39期
澤 向 崇	39期
五十嵐 猛	56期

若松 顯仁 56期
 安部 孝 57期
 奥村 悠二郎 36期
 山崎 郁紀 36期



**支部会費・通信費
 カンパの納入状況**

平成十九年七月以降
 一般年会費(三千円) 敬称略

菅野 敦子 51期
 近藤 知美 59期
 森田 松雄 43期
 菅原 淳 54期
 佐賀 敦司 49期
 吉野 泰正 55期
 若狭 一也 39期
 五十嵐 猛 56期

田島 基義 38期
 奥村 悠二郎 36期
 岩村 りつ子 52期
 通信費カンパ
 五十嵐 猛 56期
 近藤 知美 59期
 若狭 一也 39期

◇宮城県支部

支部長 千葉 仁

定例の支部総会を予定していたところに、大学から、県内高校の先生方をお招きして学生募集にかかわる入試説明会を持ち、あわせて同窓の高校教員の先生方との意見交換等の懇談会を開くことになりました、という旨の電話連絡をいただきました。これはすでに大学側が計画し、県内の同窓教職員に個別に発送済みとのことでありました。

それでは、その機会に便乗して、県内のOB同窓生にも声をかけ、その説明会の終了後に、大学の先生方にも加わっていただいて、宮城県支部総会を併催するのに絶好の機会と考え、多くの会員を結集しようとし、まず支部の役員

会を開きまして趣旨を理解し多くの現任教職員およびOB同窓生の参加を働きかけることにしました。

現任教職員の結集につきましてはは大学側が全面的に働きかけておられる、とのことでありましたので支部としてはOB同窓生の集合に意を用いました。ところが、意外なことに遭遇しました。現任教職員のところへ電話連絡し参加を促したところ、大学からの開催案内・出席要請の文書が届いていない、という事態が判明しました。現任教職員の支部役員の方々さえも見ていないという人もおり、困ったことになりました。大学側に連絡しましたが、期日が迫り埒が開きませんでした。結果的には次のようなことになりました。

日時 平成十九年八月十日
 (金) 十六時〇〇分から
 場所 ホテルJALシテイ
 1(仙台市青葉区花京院・仙台駅の西)
 参加者 大学側 五名
 学長 今西幹一先生
 文学部長 野村邦近先生

国際政治経済学部長

鈴木朝生先生
 学務局長次長 小林公雄先生
 入試課長 西園隆士先生
 同窓生 九名

その内訳は、現役高校教師は二名だけ、その他は現役の大学教授一名、高校等の非常勤三名、OB同窓生三名

開催趣旨・内容は、予定通り進められ滞りなく終了し、懇親の実も揚げ、支部としての盛り上がりもありました。大学側としては現職高校教員をターゲットに受験生の送



り出しを狙った催しでありましたが、その出席者が極めて少数になり、目論見が外れ、結果的には受験者の掘り起こしにつながらなかったことはたいへん残念であります。反省点として日時の設定、同窓の現任教員への個別の周知方法、支部との連絡等々の改善点がありましようが、今後の企画に生かすことが肝要と思われます。

現任教員の意識には、後輩が教員になってこないために同窓意識・連帯感が持てず、先輩たちの時代のような母校に対する意識が持てない等の嘆きも聴こえて来ます。

二月一日の仙台会場の地方試験に、必要があれば支部OB同窓生として応援を、と申し出ましたが受験者数等の関係で支援が無くとも、ということになりました。また、十二月に田代ひとみ先生(44回生)門下の書道展を機に、鑑賞しながら支部役員会を持ちました。

ともあれ、毎年の支部総会を続け、本部・母校との連携を密にして参りたいと考えております。

◇新潟県支部

支部長 坂井 福作

昨年、七月十六日の月曜日午前十時十三分、新潟県上中越沖(新潟の南西、約六十キロメートル)を震源とするマグニチュード六・八の大地震が発生しました。(後に「中越沖地震」と命名されるものです。)この地震により、新潟県柏崎市、長岡市、刈羽村等が、震度六強を観測したほか、新潟県中越地方を中心として、大きな揺れを記録しました。

この地震による被害については、連日テレビ、新聞等を通じて全国に報道されましたので、会員の皆様にはおわかりいただいていることと思います。電気・水道・ガスが止まり全国からたくさんの方々が駆けつけてくださり、ライフラインの復旧に尽くしていただきました。しかし、報道されるのは一部分のことであり、なかなか全部の様子はわかり、なかなか全部の様子にはならないと思われます。私の勤務校も避難所になり自衛隊による炊き出しも行わ

れました。益過ぎまで体育館に避難された方がおられましたので、私も学校に泊まる日が続きました。

この地震により、家屋が全壊したもの一二五九棟、半壊五四八七棟、一部損壊三四四八五棟にのぼっています。柏崎市内を通ると、日が経つにつれて空き地が目立つようになり、取り壊される家屋が多くなっています。

各学校も多大な被害を被り小生の勤務校では、ようやく国の査定も終わり、校舎内外の復旧工事に取りかかるところです。校舎の至る所に亀裂が走り、校舎と校舎をつなぐ部分は、すべて壊れている状態です。校舎のどこどころにブルーシートに覆われた箇所があり、階段が通行止めになつて居る場所もあります。今年度中にはなんとか工事を終え、新学期には復旧した姿で新入生を迎えたいと考えています。

このような状態でしたので昨年秋季に予定していた支部総会は開くことができませんでした。本県では二年おきに支

部総会を開いてきましたが、平成十六年十月二十三日に起きました「中越地震」の時も支部総会を開催することができませんでした。まさか同じような地震が起きるとは夢にも思っていませんでした。しかし、いつまでも地震にとらわれているわけにはいきません。今年度は、支部会員とよく相談した上で、支部総会を秋には開催する所存であります。その際には、支部の活性化を含めて、本部にはいろいろと御相談させていただきたいと思ひます。

◇福島県支部

中根 猛 (48回卒)

まなびやは日本の和

大学を卒業して二十八年がすぎました。今年の一月で、五十歳になりました。奇しくも、近所にお住まいになる、北村先輩より原稿執筆の依頼を受けました。自分を振り返るのによい機会と感じお引き受けを致しました。中学校の国語科の教員とし

て埼玉県の上尾市立南中学校を振り出しに、故郷に戻り福島県東白川郡内やいわき市の中学校に勤務しました。その後、教頭職や福島県教育センター指導主事を務めました。そして、平成十八年度よりいわき市立田人中学校校長の職にあります。併せて、本年度は、いわき市中教研国語部長として活動する場をいただいております。

その中で、二松學舎大学を卒業した先生方と一緒に仕事をやる機会に恵まれました。その一端をご紹介します。

いわき市中教研国語部は市内四十四校の中学校国語科教員約百名を越える先生方による研究会です。研究主題に沿って、実践研究を行い夏季休業中に一日の研究協議会(実践報告会)と秋には、市内の中学校を休業日にして一日の研究協議会を開催しています。この時は、各学年一クラスずつの研究授業公開と研究協議会そして講演会と充実した内容になっています。

本年度は昨年十一月十四日に開催し研究協議会の他、国語教育の研究者による講演会

を企画し研修を深めました。また、一昨年は話術の上達や古典落語への学びの機会として、プロの落語家さんをお呼びして落語の世界にひたる研修もありました。

また今年で五十八号を迎えた中学文集「いわき」の発行や市内中学生の書道展も開催しております。年度末には研究の成果を「いわきの実践」としてまとめております。

年間を通して充実した活動を行っている国語部会ですがそれを支えているのが二松學舎を卒業した先生方です。

まず、研究推進の要となる研究推進委員長には津田義仁先生(泉中)。先生は勤務校にあっては教務主任としても活躍中です。また、市内の中学生の作文を掲載した中学文集「いわき」の編集に当たっているのが文集編集委員長の伊東秀樹先生(久之浜中)です。これらの先生方のご活躍のお陰でいわき市中教研国語部は支えられていると言っても過言ではありません。

このほかにも、いわき市内の中学校の国語科の教員として、二松學舎大学の卒業生は

活躍しております。

最近の国語科を取り巻く状況は厳しいものがあります。

中教審の審議のまとめ(平成十九・二十一・七)を読むとこれからの国語教育がどうなるのか、私たちの今までの指導法の改善点は何か、様々なことに思いをめぐらします。

何か大きな変革の時を迎えつつあるのではないかとという予感を感じます。

しかし、心強いのは現場で子どもと向き合い授業を充実させ、生徒指導を行い部活動に汗を流し、そして、校務分掌の責務を果たし、その上でいわき市の国語科教育の向上のために尽力している二松學舎大学の卒業生の活躍があることです。

国語科の究極の目的は自力で本を読む人を育てることだと思います。そして、自分のあたまで考え、的確に表現できる人を育成することだと思います。

卒業生の皆さんと共に大好きな国語科の指導の充実のために微力ながら尽力していきたいと思っています。

改めてこのような機会をい

ただいた北村先輩に心より感謝申し上げます。

(福島県いわき市立田人中学校 校長)

◆神奈川県支部

事務局長 井上 興正

文学歴史探訪

湘南地区長森田亨氏の計画による秋の文学歴史探訪は、平成十九年十一月十日に鎌倉駅周辺で行われました。

当日は、あいにくの小雨模様で徒歩には多少の影響はありましたが六名の参加を得て有意義な一日を過ごすことができました。

鎌倉文学館は、加賀百万石藩主前田利家とつながりのある旧前田侯爵家鎌倉別邸であり、昭和五十八年に前田家から鎌倉市に寄贈されたものです。

鎌倉市は、鎌倉ゆかりの文学者の直筆原稿、手紙、愛用品などの文学資料を保存、展示する目的で一部を改装し昭和六十年に開館し、一般公開しました。

鎌倉文士と言われた大佛次郎、川端康成、久米正雄、小島政二郎、高見順、永井龍男等三百人に及ぶ文士の展示物があり、当日は、文学館の担当者による説明も行われ、古き鎌倉の文学に触れ認識を新たにしました。

鎌倉駅に戻り小町通りを北へ七分ほど歩いたところに近代日本画の巨匠鏑木清方の記念美術館があります。

清方は、昭和二十九年よりこの地に画室を設け、昭和四十七年九十三歳で亡くなるまで製作に当たった居宅でもあったところです。当日は特別展として「鏑木清方と官展」

(官展とは、政府が主催する展覧会のことです。)が開催されており、清らかで優美な女性を題材にした多くの美人画の数々を目の当たりにし、暫し美の世界に浸ることができ感動いたしました。

賀詞交歓会

三浦地区長前田明氏の計画による平成二十年神奈川県支部賀詞交歓会は、平成二十年一月二十日 鎌倉「二楽荘」

にて開催されました。

当日は、松苓会本部から神津賢一郎会長、東京支部長木村正雄氏及び副支部長奥井基継、佐藤理栄子両氏のご臨席と、神奈川県支部十二名、計十六名のご参加をいただき午後一時に前田三浦地区長の開会の言葉で始まりました。

当支部の支部長菅吉四郎から年頭の祝辞があり、来賓の神津松苓会会長から丁寧なご祝辞と、木村東京支部長、奥井、佐藤両副支部長からもご祝辞をいただきました。

当支部の事務局長井上興正の乾杯により開宴となりました。途中で神奈川県支部の現況についてご紹介させていただきました。

様々な話題で大いに盛り上がり和気藹々のうちに午後三時十分に廣田副支部長の閉会の言葉で終了しました。

松苓会神奈川県支部賀詞交歓会出席者

来賓

松苓会会長

神津 賢一郎 (27回)

東京支部副支部長

奥井 基継 (修14回)

出席者

東京支部長

木村 正雄 (25回)

東京支部副支部長

佐藤 理栄子 (42回)

神奈川県

支部長

菅 吉四郎 (25回)

副支部長

廣田 克己 (修5回)

事務局長

井上 興正 (27回)

横浜地区長

中川 俊一郎 (修10回)

中川 順子



県央地区長

保田 完次 (41回)

県央会員

保田 陽子 (39回)

県央委員

平野 光治 (40回)

三浦地区長

前田 明 (修15回)

湘南地区長

森田 亨 (修15回)

湘南会員

川崎 敬子 (51回)

川崎地区長

高橋 佐和子 (57回)

◆千葉県支部

副支部長・地区長

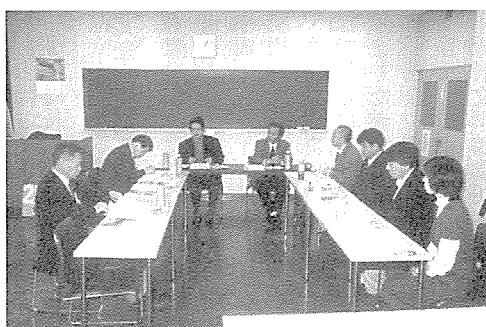
前田 康晴

第一回香取・海匝・山武地区会の報告

平成十九年十一月十日(土) 十三時~十五時。第一回香取・海匝・山武地区会「二松學舎の今を知る」を開催いたしました。出席者(敬称略)は、地区員の宇井三男、小原伊知郎、前田良子、中墓格之、前田康晴。千葉県支部からは、支部長の大山徳高(学校法人

二松學舎理事長)、副支部長の辻将一、事務局の十名でした。

最初に、大山支部長から挨拶とともに大学の「今」のお話を頂きました。順調に発展する母校の現状を聞き、出席会員一同胸をなでおろした次第です。終了後は、有志五名が近くの居酒屋にて親睦を深めました。



◆静岡県支部

支部長 神津 賢一郎

平成十九年の静岡県支部総会については、来賓としてご

来駕いただいた文学博士磯教授(松苓会監事)が会報三十七号に「静岡県支部総会・懇親会出席顛末記」としてご寄稿いただきました。改めて厚く御礼申し上げます。

ところで、磯先生にはご出席をお願いしただけでなく、「磯ゼミ」の静岡県卒業生に磯先生から直接、総会出席依頼の連絡をお願いしてしまつたのです。大変ご迷惑なお願ひです。ところが、磯先生は快く引き受けてくださったのです。しかも私の不手際で、総会開催の間際になつてお願ひでした。それにもかかわらず、「磯ゼミ」の卒業生から電話で、出席通知や、急なことなので都合がつかないの

で宜しくお伝えください、という電話をいただきました。本当に有り難いことだと思ひました。若い会員への足がかりが出来て大変嬉しく思ひました。

卒業生と大学との繋がりの中で、「ゼミ」との繋がりは大きいと思います。今回、磯先生にお願いしてそのことを実感し、卒業生への呼びかけに示唆を感じました。

さて、松苓会活動の活性化といふことが叫ばれて久しく続いています。活性化には若い方の参加が必要だと思ひます。いかにして若い会員に参加してもらえるか、なかなか難しいです。幸い平成十九年度静岡県支部総会に出席された一番若い会員は卒業期七十一期生です。



そして「磯ゼミ」で参加された六十五期の方の出席は嬉しいのです。なにしろ私は二十七期ですから。

本年の支部総会には若い会員の支部長の誕生を期待しています。

◆近畿支部

末吉 榮三

松苓近畿戊子新年互礼会を開く

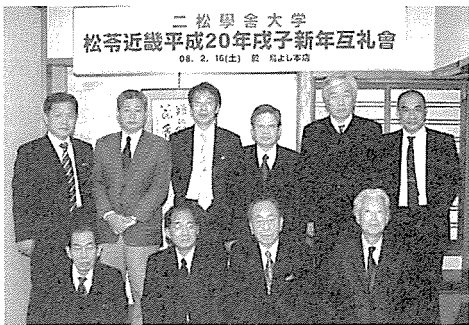
渡邊了好事務局長、松田存副会長の臨席を仰ぐ

恒例の新年互礼会は総会を兼ねて行い、事前に支部長会議を行う。今年は近畿に支部を創設して六十年、還暦を迎える。記念行事案を検討し、開催時期に八月を予定し、具体事項は後日に議することにす。

互礼会は、大学から渡邊先生、本部から松田先生を迎え、午後四時三十分開催する。

参加者は、来賓の他に大阪区が大鑄文五(19)、世古幸生(44)、斎藤衛(49)、奈良区が末吉榮三(12)、辻一(39)、三重区が稲垣武嗣(33)、小川直紀(44)、兵庫区が武内昭徳(47)、和歌山区が明治利隆(47)の総勢十一名。

進行を大鑄氏が掌り、物故者への黙祷を捧げ、末吉代表が挨拶する。



先ず、近畿会員の現勢について、三百二十五名が近畿に在住、文学部が三百六名、国際政治経済学部が十九名。府県別分布は三重県が四十名、滋賀県が二十二名、京都府が三十三名、大阪府が七十六名、兵庫県が七十六名、奈良県が四十名、和歌山県が三十八名となる。

昭和二十三年の発足当時は近畿一円の組織体で生まれた。平成六年に各府県単位の活動の組織体にし、その連絡役として近畿連絡協議会が設けられた。

この恒例の新年互礼会は発足と同時に進められていた。初

代の会長、一期の黒川喜久郎氏が正月二日に自宅座敷を松苓会の互礼の場として開放された。この日には今は亡き浦野さんをはじめ、歴代の理事長、学長方も参会の中に居られた。

この道を継ぐ姿が今日の互礼会である。そうして今日、松苓近畿は創設して六十年になると披露する。渡邊学務局長は今西学長の代理と前置きして母校は今年創立して百三十一を迎え、私学は今や冬の陣、幸い二松學舎は定員割れなく、全国区の大学の様相が地方からの志願傾向に見られるようになってきた。

また二松學舎の「学」（まなぶ）を九段の地に集約する一弾として九段上に校地を取り得し、工事に着手している。器に呼応した教育内容の刷新充実には日夜奮闘していると母校近況を話される。

松田先生の乾杯で新年を寿ぐ。昔、二松學舎のことを、その老舗を評して「小粒ながらびりつとした味がたまらない」と表現されたが、今夜の宴は正にそのままの姿、明治の二松氣質が存分に伺えた。

◆滋賀県支部

事務局長 角井 良暢

二松學舎大学松苓会近畿、滋賀県支部長就任の御挨拶と支部の活動と現状報告について、ここに御報告させていただきます。

今回、滋賀県支部長の重任を仰せつかり就任をさせていただきました。日頃、母校には大変遠ざかっております状況において、支部長の任を依頼され、その大役に今から不安を感じております。

過去の滋賀県支部長として多大なる御尽力を賜りました第一期支部長の故塚原鉄雄先生には、先生の御生前は一方ならぬお世話になり、現在におきましても故塚原鉄雄先生の奥様には日頃の御付き合いをいただいております。滋賀県支部の礎を築かれました先生の後を多少なりとも協力させていただけようように勤めてまいりたいと考えております。

何卒よろしくお願いいただきまして、近畿各県の皆様や各都道府県卒業生の皆様の助けを願いまして御挨拶といたします。

当方は現在、大学を卒業後に滋賀短期大学附属高等学校（現在は滋賀女子高等学校）にて勤務させていただき早三十年近くとなっております。母校、文学部中国文学科にて御教授いただきました教育の指導方法を頼りに模索をしながら現在に至っております。

国語教育と共に芸術（書道）の指導、さらにスキルアップを兼ねて情報教育の教員資格を取得し、各教科の授業に奮闘しております。

女子教育九十年の歴史を重ねてまいりました滋賀女子高等学校も本年度三月をもちましてその長い歴史を閉じ、二〇〇八年四月からは新たに滋賀短期大学附属高等学校として共学校のスタートをいたします。そのような節目の時期に滋賀県支部長の大役を仰せつかりまして、不安と重責を感じております。

滋賀県の活動と状況の特色は、直接的な活発なるもので

はなく実に地味な穏やかなものであると感じております。実際は、県内卒業生の縦横の連絡もあまりなく、年に一、二度程度の情報が得られるのが実際です。やはり、年齢的な活動の活発・不活発な時期が到来するのでしょうか、当方を含め数多くの県内卒業生の方々は、現在御活躍されております場において、日々の任務に追われて、なかなか母校松苓会の活動には時間が割けないのが現状です。

日常生活に追われる時期を経て、ゆとりが生じます年齢となれば、各支部会員の皆様も活動に参加・協力を得ることが可能となると確信しております。

これも滋賀県気候・風土の特色が強く関係しているでしょう。滋賀県は日本全国の都道府県の中でも自然災害の非常に少ない大変穏やかなのんびりとした土地柄でもあり、人間の育まれる素地においてもその影響が強く現れていると感じております。その色が県内の支部活動の様子として長年培われてきているように思います。

近隣である近畿各県の各支部長には大変じれったく思われていることと痛感しており、滋賀県の個性として、早急には改善・変化を求めていくのは困難であると思いま

す。支部によりましては情報の交換・情報誌の発行・懇親会の開催など、一年を通して非常に活発に活動されているのも伝え聞いておりますが、なかなか当支部におきましては同一步調にて進行することは困難かと思えます。しかし、

回想・同期会事始め

筑紫女学園大学短期大学部長／松茶会福岡県支部長

永淵 道彦(36回)

痺れを切らした山崎郁紀君(北海道地区幹事)が、把握できる限りの同期諸氏に招集のハガキを出したのは、もう十数年前になるだろうか。それも飯田橋駅法政大学側の改札口に集まれという、藪から棒のハガキである。

それまで、連絡の取れる者が数人で時々会うことがあり、山崎君の唐突な招集の数年前

そのような中におきましても徐々に改善していき、少しでも活発に情報の交換・情報誌の発行・懇親会の開催を目指したいと考えております。

支部長が中心に引張っていく独善的な活動ではなく各支部会員の方々により協力・活動を援助していただきながら地道に変化を求めていきたいと思っております。

何卒、御協力・御支援をいただきますことを御願いし、支部の活動と現状報告についての御報告といたします。

から、他学園から二松學舎に戻って来ていた大山徳高君(現法人理事長)と私等が同期会をそろそろ企画しようじゃないかと言っていた矢先であった。

学窓を巣立って幾星霜である。果して何人の同期が集まるのであろうか、会場は集まるところから決めようということらしく、集合の場所と時間だ

けである。心配しながら私も馳せ参じたが、案ずるより生むが易しである。山崎君の出し抜けの呼び掛けは功を奏し、実に女性六人を含む十六人の同期が集まったのである。

学生時代の面影を色濃く残している者は良いが、面貌が変わり名乗らなくては分からない者などは、えーっ何々君なんか、と改札口前でお見合の様相であった。でも良く集まったものである。三十六期生は全学合わせて百四十人前後の卒業であり、その一割以上の十六人なのである。

遅れて来る同期が居るといけないので、面影が余り変貌していない私等が改札口に残り、他は手分けして人数を収容できる会場となる居酒屋を探しに走るといふ仕儀であった。二次会はその半数で神楽坂のスナックだったのではないかと記憶する。

後々には九段会館、そして千代田校舎十三階の学内レストランなどに会場を設けたが、暫くは事始め同様の形で同期会を行い、学生時代に戻り、楽しい一時を持つに至っている。

二回目あたりの同期会であろうか。しまほつけ、トロカツオ、サイコロステーキ等の品書きを背景にした記念の写真が手元にあるが、女性では長崎からの田中和子(旧姓・城谷)さん、福島からの福原路子(旧姓・会川)さん、茨城からの金山甲順さん、埼玉からの青山和子(旧姓・清水)さんの顔がある。男性では大山君や山崎君や私はもちろんであるが、阿部誠文君(九州女子大学教授)、那花隼君(仏師・茨城県支部長)、奥村悠二郎君(北海道支部長)、沖山吉和君(二松蠶糸大学講師・元高校校長)、小川孝君(元中学校校長)等の顔がある辰巳正明君(国学院大学教授)

や加茂忍君(書家・大分県支部長)の顔はないが、この折りは欠席したのであろうか。現在のように六百数十人の卒業生では我々三十六期のよいうな同期会は困難であろう。少人数の同期生だからできたことであろう。現在は大学当局と松茶会が共催で企画するホームカミングデーが、毎年八月初旬に行われている。そのこともあってか、毎年であった我々の楽しい牧歌的とも言える同期会も間遠になっていく。ホームカミングデーはホームカミングデーとして、事始めの頃を振り返り、このような手作りの同期会も大事にしたいものとの思い頻りである。

『教科書検定 県民大会の意義』

沖縄県支部長 金城 健一

平成十九年九月二十九日付で「松茶会報」第三七号への原稿執筆依頼の文章が届いた。奇しくも九月二十九日沖縄では「教科書検定意見撤回を求める県民大会」が開かれた日

である。高校の教科書検定に端を発した大会に主催者の予想をはるかに越える十一万六〇〇〇名の人々が集まった。二松學舎大学の卒業生の多くが中学、高校の教師の道を選

んで活躍しているだけに県民大会の事が書きたくなくなった。幸いにも原稿内容は自由に執筆していただければ……と記されていたので筆を進めます。

本論に入る前に十月十日創立百三十周年を迎える「二松學舎大学」に心からお祝いを申し上げます。その期をひとつにして松茶会及び法人側の役員が一新されたことを心から喜びたい……県支部長を拝命し、毎年松茶会幹事会、総会に出席して来たが、会議の都度聞かされる法人側への物言(ものいい)? 桐嶋(とうかづ)するような会員同志のやりとり。ある時には警備員を配置してまでの幹事会の開催など気の重い会議への出席だっただけに、この度(たび)の神津会長、法人の大山理事長体制には大きな希望を持ちたいと思うし、小生も南の島の支部長の一人として、二松學舎への学生集めに多いに努力して行きたいと決意しています。前述が長くなりましたが本論に入ります。

九月二十九日、県民大会会場の宜野湾海浜公園では、開会二時間前の午後一時には、

人々の集まりが始まり、一時間前になると参加者の行列は途切れることなく押し寄せ、会場広場を埋め周りの道路にも人が溢れていた。

戦争を体験したお年寄り、若い両親に手を引かれた子どもたち、制服姿の中学生や高校生など十一万六、〇〇〇余の人が集まった。沖縄県人口は約三十七万人。人口比で言うなら東京なら百万人規模の大集会である。

沖縄戦の際に起こった「集団自決」で軍の強制があったことが、文部科学省の検定によつて教科書から削除された。

その報道が三月末になされてから半年、沖縄戦の史実が消されていくことへの危機感と怒り、そして抗議の声は日々速度を増して広がっていった。

特に沖縄県民の心を揺さぶったのは、自らの体験と必死の思いで語る沖縄戦体験者の姿だった。思い出すのもつらく苦しい、と口を閉ざしていたお年寄りたちも、これが話をする最後の機会だというように自らの体験を語りはじめた。そして戦争を知らない子や孫の世代は、体験者から直

接話を聞ける残り時間が少なくなつたことを感じながら、今こそ真摯に耳を傾け、体験者の記憶を受け継ぐ努力をしなければ、という思いにかられた。戦後六十二年、沖縄のなかで語り継がれてきた沖縄戦の記憶と、それを受け継ごうという思いが、マグマとなつて県民の足を大会場へと向かわせ、十一万余の大集会になった。

沖縄本島中部、普天間基地のある宜野湾海浜公園方向行きの民営のバスも船も全て無料の人々を送迎した。

集団自決があつた渡嘉敷(とがしき)と座間味(ざまみ)島の生存者も自らの体験を次のように語った。

『渡嘉敷島、座間味島に日本兵がいなければ集団自決は決行されていぬ。軍隊の弾薬、手りゅう弾が民間人に渡らなければ「集団自決」は決行されない。手りゅう弾は日本軍から渡された。「いざという時はこれで自決せよ」と。大会に参加した人々はもとより、テレビ中継の前に座り、ラジオに耳を傾けていた数十万人の沖縄県民は、体験

者の言葉を心に刻んだに違いない。戦争を知らない高校生の代表は訴えた。「沖縄戦を体験したおじいおばあ達が嘘をついていると言いたいのでしようか、嘘を真実と言わないうで下さい」と。

教科書検定の論争は国会の場へ舞台を移した。二松學舎

さんなな会(37回卒)還暦を祝う

同期会に参加して

吉野 恵津子

平成十九年七月二十八日(土)・二十九日(日)、日

本を中心に位置する、静岡県熱海ホテルにて、卒業40年、節目の同期会が開催されました。

さんなな会は各分野で優秀な人材を輩出、卒業20年の頃から、松茶会青年部・同窓青年の会として集い、旅行・会報発行等々、活動して参りました。

卒業30年の会では、カナダ留学から戻ったばかりの長男急逝の心の傷を旧友に癒され、本年は43年前二松學舎大学進学を薦めてくれた夫の

出身の多くの後輩達が、中学や高校の教師として巣立って行く。その後輩教師たちが正しく教え導いて行ってくれる為にも今回の教科書問題、政府が正しい判断を示すよう南の島からみつめて行きたい:

二〇〇七年十月三日記

遺影と一緒に参加いたしました。

午後六時、32名が出席。幹事の司会で物故者八名に黙祷、そして乾杯、近況報告と祝宴に進み、それぞれが素敵に年を重ね、一生懸命に輝いた40年と余生にかける意気込みに、さすが二松の卒業生だと再認識し、旧交を温めました。ホテル屋上からの海上花火大会では、打ち上げの潔く散る大輪の花の中、彼の青春に思いを巡らしました。二次会は部屋に集合、40年前の名物先生、授業、レポート、千鳥ヶ淵、靖国神社、武道館、

新館学食のこと等々、尽きぬ話題に皆20歳の若者の顔でした。

二日目は、熱海ホテル前で



記念撮影、MOA、初島観光、帰宅グループと分れ、来年のホームカミングデーでの再開を約束しました。

深澤さんから戴いた「陽明学のすすめ」は、混迷の現世に的を得た書籍で感動致しました。私は所属の会で発行した世界遺産かるたを購入して頂き、心豊かで和やかな二日間でした。

八月末には、県支部会先輩後輩に同期の自慢をし、磯教授のお取り計らいで「かるた」を大学にも置いていただけたことになりました。

九月には、NHK学園社会福祉コースで二松を会場に選んだ知人から『東京の真中、

抜群の環境、小さい中にも真の学びの大学の雰囲気の漂うところ』との評価に誇りを感じ

二松学舎大学「漢詩研究会」

鑑賞、創作味わい尽くす

烟籠幽樹午寒侵(けむりはゆうじゆをこめ ごかんおかす) 翻閩古書閑撫琴(こしよをほんえつし) かにきんをぶす)

漢詩研究会(顧問大地武雄教授)の柏キャンパス代表の早川太基さん(20)の作品の一部。山荘の静けさをうたったが、「実際には寂しい山にこもったわけではありません」。

二松学舎大主催の漢詩コンクールで最優秀賞に輝いた。

じました。大学の益々のご発展と、さんな会の惜しみない友情を祈念いたします。

鑑賞も創作もする。週一回、古典などを読む「素読」では一人が読んだ後を他の人が復唱。「たくわんに味がしみていくように」、自らを漢詩漬けにするのだと言う。

年二回の合宿では、互いの作品を評価し合う。「きれな夕暮れをよんでいたら、最初の感動より深みが増してきた」と井上功太郎さん(20)。

昨秋の学園祭に合わせ、書

道部との協力が実現、早川さんの作品が金色の文字の立派な掛け物になった。

部員はいま六人。仲間を増やすためにも漢詩の魅力をもっと広めたい。

早川さんは語る。「いかに生きるべきか真摯に問い詰めてきた歴史、その一員に加わって行く喜びがある。虫の声を聞いて千五百年前の人と同じ気分になれるんです」

メモ

(片山健志)

松苓会奨学金を受けて

(第九十二回書教展 文部科学大臣奨励賞受賞)

文学部中国文学科 四年 望月 真里

松苓会奨学金及び課外活動援助金を賜り、本当にありがとうございます。

昨年、書道の教育実習で母校へ行った際、担当の先生に一つ課題を出されました。それは「書教展に作品を出すこ

と」でした。私は今までに個人で展覧会に出品したことがなく、少し戸惑いはありまし

たが、大学生活・教育実習の思い出としても良いと思い、教育実習終了後に何度も何度も母校を訪ね、作品を完成さ

せました。

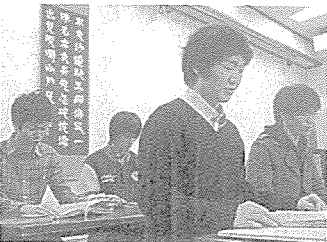
時には、これで完成と思っていた作品に印を逆さまにしておしてしまい、一枚書きあげるのに五時間を要する作品製作が嫌になった日もありました。

教育実習で私がお世話になった先生(担当の先生)も二松学舎の卒業生で、私をこの二松学舎大学に導いて下さった先生です。

二松学舎大学というすばら

しい大学のおかげで、たくさんのお会いがあり、すばらしい賞をいただくことができ、大変うれしく思います。これからも二松学舎大学で学んだことを活かし更に多くのことを学んでいこうと思います。

書教展に出した作品は教育実習で生徒にも教えた高貞碑を選び、敢えて生徒に教えた場所を入れて臨書しました。



素読に取り組む二松学舎大漢詩研究会のメンバー=千葉県柏市で

横溝正史旧蔵資料収蔵

「横溝正史旧蔵資料展」と

記念講演「父・横溝正史を語る」開催

二松学舎大学は、日本を代表する小説家・推理作家である横溝正史氏（一九〇二年～一九八一年）の旧宅から発見された旧蔵資料を所蔵することになった。



横溝正史旧蔵資料収蔵記者発表の様子

資料は『犬神家の一族』、『八つ墓村』など、代表作の草稿や、未発表作品『霧の夜の出来事』の原稿をはじめ、映画やテレビドラマなどのシナリオ、執筆時に種本とされたと言われている洋書や洋雑誌



横溝作品シナリオ

誌など二千六百点あまり。また、横溝家からは、遺愛品や江戸川乱歩の書簡などの寄贈をうけた。これらの貴重な資料を収蔵することにより、二松学舎大学は大衆文芸文化に関する教育研究の機会を得ることとなった。また、資料散逸の危機を避けるために文化的機関での一括収蔵を望まれていた御遺族の意思も尊重することができた。

二松学舎大学の横溝正史資料コレクションは、北九州市立松本清張記念館（松本清張生誕の地）、立教大学江戸川乱歩研究センター（立教大学の隣接地に旧宅）と並んで、日本のミステリー研究に欠かせない文献資料の拠点となった。

資料収蔵を記念し、平成十九年十二月一日より、九段キヤンパスの大学資料展示室で「横溝正史旧蔵資料展」を、また平成二十年一月二十六日（水）十三時より九段校舎二〇一教室にて横溝正史長男亮一氏による記念講演「父・横溝正史を語る」を開催。資料所蔵のニュースとともに大きな話題を呼んだ。

大学資料展示室の横溝正史旧蔵資料展は、一期と二期に分けて開催された。一期では、ミステリー作品の草稿や未発表原稿が展示され、横溝正史の作品執筆の過程が視覚的に提示された。二期では、ラジオやテレビドラマ、映画のシナリオなどの資料が展示された。また、両期間を通して、江戸川乱歩書簡や遺愛品の一部も公開された。こうし

た資料を一般に公開すること大学の使命のひとつだろう。



横溝正史旧蔵資料展

旧蔵資料展と連続して開催された、横溝正史の長男で、音楽評論家である横溝亮一氏の講演会には、たくさんの方の学生や文学研究者、横溝正史ファンが集まった。亮一氏は、父横溝正史のひととなりや、思い出、江戸川乱歩のこと、横溝作品への思いなどを語った。その様子は、三月に刊行された二松学舎広報誌『學』第二十号・特集「横溝正史」に掲載されている。ここでは、その一部を紹介する。

横溝正史旧蔵資料収蔵記念講演会「父・横溝正史を語る」

家庭人としての横溝正史

私のように四六時中一つ屋根の下にいた者は、精神的な面も含めて、全体像を見るよりも部分像を見ていることが多い。全体的に惚れ込むということはなかなか出来ませんが、したね。父親と息子の関係はなかなか難しい。僕はしよつちゅう理由も無いのに怒鳴られて。（中略）父横溝正史の全体像を語ると、正直、人間として受け入れ難いところもあったと思います。もちろん、非常に良い面もたくさんありました。今思い出してもなつかしいな、いい親父だったなと、思わず胸に迫るようなこととあります。しかし、全体をみると、常識、良識で自分の感情の動き、行動などを抑えて、平静に保つことがなかなか出来ない、（中略）良識的な行動よりも、非常識の中に真実を見出すというか、人にとり思われても平気だというところがあるのだと思います。でも、大人になるにつれ

て、創作をする者がいかに苦しむかということが良くわかってきました。

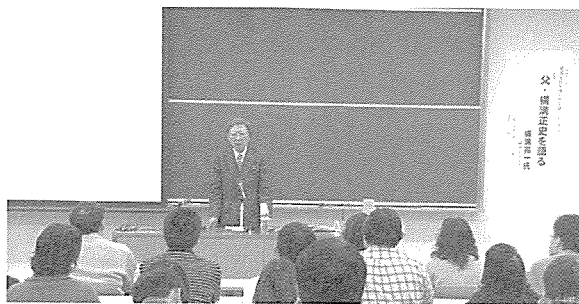
(中略)

日本の推理小説を

もつと世界に

親父は、色紙などを頼まれると、「論理の骨格に情緒の衣を着せましよう。」、あるいは「浪漫の衣を着せましよう」という言葉を書いています。その浪漫とか情緒とは、犬神家や戦後の出世作となった『本陣殺人事件』の一柳家という地方の金持ち、分限者の一族に色々な人物像が絡み合う日本的な因習の世界です。その中に論理の骨格を持ち込むのが、親父独特の個性だったと思うのですが、そういうものは外国語に翻訳しにくい。特に『獄門島』の様に、いわゆるマザーグースの手法を取り入れたものなどは、日本語という言葉の音などを上手く利用している訳で、これをどう翻訳するかは、なかなか難しい。(中略)ところが、案外そこはすり抜けて、外国で

ももつと六カ国語で読まれるようになったというのは、うれしいことで、もつともつと幅広く、日本の推理小説が紹介されるべきだと思っています。



記念講演会「父・横溝正史を語る」

また、同じく『學』第二十号には、二松学舎大学文学部国文学科の江藤茂博教授、同山口直孝准教授と、横溝正史研究家の浜田知明氏の鼎談も掲載されている。

この記事では、新時代の文学状況をも踏まえ、伝統だけではなく創造も視野に入れ編

成されている「国文学専攻」、映像の物語の分析方法、マンガ表現の特質、演劇の歴史や現在を学ぶ「映像・演劇・メディア専攻」、欧米文学・文化との比較研究のプログラムも含まれる「比較文学・文化専攻」など、個性的な専攻を有する二松学舎大学文学部での、横溝正史研究の今後の課題にスポットが当てられている。

旧蔵資料に視る、

横溝ワールド

シナリオは、

宝の山のようなもの

(中略)

江藤 シナリオは刷り部数が関係者分しかありませんし、雑誌よりもずっと数が少ないので、消えてしまう可能性があります。なかなかまとまって残らないものですから、今回の映像関連の資料はとても貴重です。シナリオは、映像化の問題を考える上で、宝の山のようなものです。

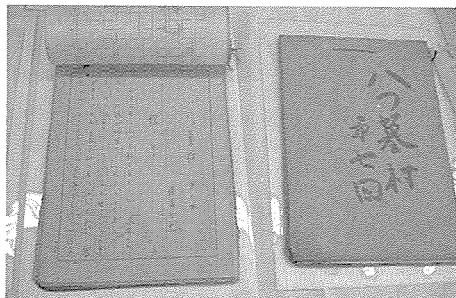
(中略)

学生にとっても、生成過程を体感的に学べることは大きい。

(中略)

山口 私のゼミに、来年度、横溝正史を卒業研究で取り上げる学生がいます。そういう学生は、これからどんどん出てくるでしょう。講義での、ことばによる説明だけでなく、生の原稿に触れることで生成過程を体感的に学べるのは、学生にとっても貴重な体験です。

横溝正史は、当時の純文学の作家との交流もあり、影響も受けています。文学史をより全体的にみていくためには、江戸川乱歩や横溝正史ら探偵作家の仕事もきちんとみていく必要があります。横溝の作品は、時代を映す鏡のようなところがある。犯罪をあつかう以上、その時々々の価値観などが必ず反映されている。文化研究としても横溝正史は無限の可能性をばらんでいます。



『八つ墓村』原稿

江藤 また、メディアが展開した時代に書かれていますので、作品に取り入れられたメディア文化や、逆に映像化によるトリックの変更などもあります。横溝正史を通してのメディア研究も期待できますね。

二松学舎大学の新しい「顔」、横溝正史研究。旧蔵資料収蔵により、映像・メディアを含めた大衆文芸文化の研究教育がはじまる。

